

平成 28 年度第 2 回国頭村小学校交流学習

辺土名小学校及び村内へき地 5 小学校（北国・佐手・奥・安田・安波）

平成 28 年度第 2 回目の国頭村小学校交流学習、第 1 回は 6 月 21 日に奥間小学校で実施され(リフレクションシートNo.165)、今回が今年 2 回目の交流学習になる。

国頭村教育委員会独自の事業であるがその目的や意義については前回のシートでご確認いただきたい。

さて、右の写真は本年度 4 月にへき地安波校に赴任してきた教師である。日常は限界の少人数複式クラスの担任をしている。今日の交流学習を機会に通常学級での「学び合う」授業への挑戦である。「こんな感じかな〜」不安を抱きながら子ども達と向き合う授業者の姿である。



[1年] 授業者：T先生（安波小） 国語「楽しかったことを書こう」



教科書に示された挿絵について「楽しかったことなのか？ がんばったことなのか？」ペアで考える。左写真、挿絵を拡大した資料で子ども達は語り合う。まったく違和感なく楽しそうに自分の考えを仲間に伝える。聴き合う関係が成立し、へき地校の子ども達も窮することなく教室の仲間と探究者になる。

授業者は、教科書で基本的な「楽しかったこと」、「がんばったこと」を押さえ、さらに授業者自身の楽しかった体験を話した。いよいよ子ども達は自分の「たのしかった。がんばった」ことについて書くことになる。



しかし、なかなか鉛筆が動き出さない1年生の難しさの壁にぶちあたる。やはり、ワークシートと教師の話だけで「今やること」を理解できて動いたのはわずか数名だけだった。授業者は、途中に具体的な書き方をもう一度黒板に記して子ども達に「書き方」の確認をして、再度ワークシートに向かうように促した。・・・チャイムになる。



タイムマネジメントの大切さがある。県教育委員会も「45分完結の授業づくり」を目指すよう提言している。本日の授業は他校の学校の教室での挑戦でもあるが「どうにかできなかったか」授業者に新たな挑戦が子ども達から提供された。

[1年] 授業者：T先生（辺土名小） 道徳「はしの上のおおかみ」

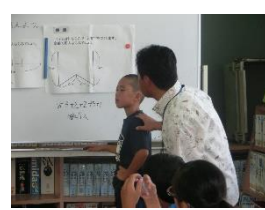
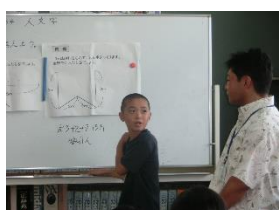
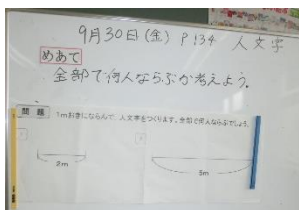


授業者は担任である。じつにしっとり落ち着いた教室で、授業における対話も淡々と交わされている。教師の「子ども達の声を聴きたい」姿勢が明確に発信されている。「しっとり素敵な授業ってこんな感じかなあ〜。」を思わせる空間を創りだしている☆教師の声も小さく、テンションも低いのになぜ子ども達がひきつけられる？



[5年] 授業者：H先生（奥小学校） 算数「人文字のつくり方を考え、説明しよう。」

こちらでもへき地校の教師が頑張る。人数が多いので授業は図書館を使って行われた。最初の共有課題の解答の仕方を説明する児童、発表を支える仲間の眼差しが注がれる。言葉につまる児童に声をかけ励ます授業者、そっと肩に触れている手がいい。5年生にとっては5年目の交流学習である。受け入れ校の辺土名小の子ども達やへき地校の子ども達もだいぶ互いに慣れてきている。中学校では毎日一緒の仲間になる。中学校へ進学した時どんな始まりや、関係を築くことができるか？私たち教師側が気にかけていたい。



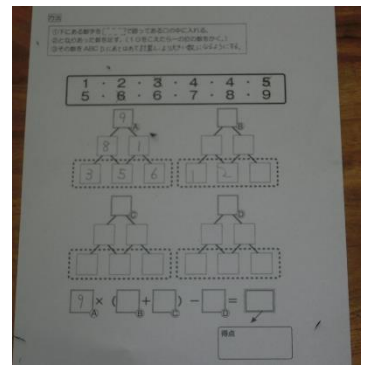
[6年] 授業者：Y先生（佐手小） 国語「回文について知り、グループで回文づくりに親しむ」

へき地校3年目の教師、国頭村に赴任して「学び合う授業」への挑戦にひたむきに向き合っている。最近と同僚と一緒に国語科における授業づくりに邁進している、「分らないこと」が「分かるようになる」、見えなかったことが見えるようになる。子どもたち以上に教師が夢中になって授業づくりと授業力向上に進んでいる。子ども達の表情から自分の授業をふり振り返り同僚と互いに「聴き合う」。先日、佐藤学先生の講演会の後、同僚と二人で学先生に直接話を伺いに来た。・・・この熱意が授業を変え学校を変えるのです。



[4年] 授業者：R先生（安波小） 算数「計算のきまりを使って」

まず、授業デザインが分かりやすい。はじめの課題（共有課題）をペアやグループに下ろす。題意や解答の仕方を確かめ、最初の共有で児童が発表する。仲間たちは、自分の解答と見比べて確かめる。ここまでは共有課題なので「分からない」子がいても、次のジャンプ問題で頑張ってみることを促す。さて右の写真がジャンプ問題である。「難しい、簡単ではない」ことが要求される。子ども達はまず自分で解決しようと試みる…できないことを知り、仲間と協同解決に向かう。つながりが生まれる、身を寄せ合い、聴き合い、解決に向かう意思を示す。



[5校時：焦点授業（2・4・6年）] 4年 授業者：A先生 国語「一つの花」

5校時は村内の先生方の研修機会として、辺土名小の先生方による焦点授業が3クラスで行われた。4年生担任のA先生は、今年度4月からの赴任である。不安や疑念で揺らぐまただ中の授業公開である。「こんな感じかなあ～」、「これでいいのかなあ～」、「なぜ私の言葉が、子ども達に届かないんだろう。」不安を上げればきりが無い。しかし、教師としての使命が授業者を支える。目の前の子ども達を私が育てなければ、私があきらめるわけにはいかない。『一緒に頑張り、一緒に学び、みんなで支え合う』。赴任して半年、国頭村の教育施策やシステムを理解するのも今からである。焦りは禁物！「やんちゃだけど憎めない可愛いらしさがある。」この言葉を大切にしてほしい。



読む



書き込



伝える



共有する

まずは、身体力を抜いて、じっくり子どもと向き合ってみましょう。そして子ども達の言葉に教師の心を傾けてみましょう。子どもの言葉や表情から必ず見えてくるものがあります。

（東海国語学びの会 石井順治）

[斎藤智哉先生より]

- ☆ 低学年は短い時間のペアをたくさん入れる。中学年以上はなるべく早く1回目のグループを入れる。
- ☆ 子どもと子どもを「つなぐ」⇒教師の重要な行為。教師のケアが子ども同士のケアを生み出す。
- ☆ 協同的学びは、子どものプライベートな関係からパブリックな関係への編み直しである。
- ☆ 協同的学びは、教師と子どもの「教える ⇒ 教えられる」という権力の関係の網み直しである。